

明晰な頭脳、 破天荒な知的冒険



稲賀繁美

国際日本文化研究センター副所長

総合研究大学院大学教授

読後何十年たっても、ふとその一節が鮮やかに蘇る。平川祐弘氏の著書には、そうした靈力が潜む。博覧強記というが、この著者は、手抜きのない博搜に、抜群の記憶力を駆使して材料を仕込み、それを平易・簡明な行文のうちに組み立てて、間然とするところがない。福澤諭吉や森鷗外に範を仰ぐ「洋行世代」を自任するこの「絶滅危惧種」は、紫式部やダンテの声に耳傾ける「英才」でもある。この「教養学士」はまた、反体制ならぬ反大勢を自称し、「出る杭を打つな」と主張する異端児振りも発揮する。時に論争も辞さぬが、筆禍が弁論誅殺を招かぬ今の日本に生きて「まあよかった」と（夏目漱石の顰に倣い）公言して憚らない。「窮達を以て節を更ふ可べからず」を格言とし、国際文化関係論喫緊の話題を、英・仏・独・伊ほかの外国語も駆使し、臆せず海外展開する。だが北米で磨いた毒舌や、毀誉褒貶を招く正論の裏には、高雅なる人間性への透徹した観察があり、香しい個性への詩的な讃仰が萌している。巻を置く能わざるその筆運びに堪能しつつ、常識を覆す議論に首肯し、あるいは卒倒する——。「未知との遭遇」となる若い読者にとっても、それは稀有なる知性への扉、学問の醍醐味への誘いとなることだろう。

推薦の
ことば